2004 年 1 月 9 日

人間科学研究科委員長　殿

高崎　文子　氏　博士学位申請論文審査報告書

高崎　文子　氏の学位申請論文を下記の審査委員会は，人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが，2003 年 12 月 9 日に審査を終了しましたので，ここにその結果をご報告します．

記

１．申請者氏名：　高崎　文子

２．論文題名：　幼児期における目標志向性の形成と変化に関する研究

３．博士論文審査要旨

■本論文の主旨

本論文は，達成動機づけの個人差を説明する「目標志向性」を，達成場面において個人が適用する認知的枠組みであるととらえ，その形成や変化のメカニズムと影響要因について実証的に検討したものである．特に目標志向性の形成時期であると考えられる幼児を対象に研究を行った．その結果，達成に関する認知的枠組みの形成は，「承認」の与え方に影響をうけ，目標志向性や達成行動の個人差となって表れることが判明した．

■本論文の構成と概要

本論文は，全 6 章（第１章：心理学における動機づけ研究の動向，第 2 章：「目標理論」における研究方法，第 3 章：社会的承認と目標志向性，第 4 章：目標志向性の形成，第 5 章：目標志向性の変化の可能性，第 6 章：総合的考察）から構成され，著者の行った１０の研究が含まれている．

第１章では，動機づけ研究の系譜の中に達成動機づけ研究を位置づけ，さらに本論文で取り上げる「目標理論」が説明されている．その中で，これまでほとんど行われていないが，達成動機づけ育成という点からも動機づけの発達的メカニズムの解明の重要性が指摘された．また，達成動機づけ研究に発達的視点の導入を可能にするものとして，達成場面における目標志向性を「達成に関する認知的枠組み」ととらえることが提案された．

目標志向性を認知的な枠組みであるととらえると，その形成は社会化の過程を通じて重要な他者からの影響を受けると考えられる．このため本論文では，周囲の大人による子どもの達成へのフィードバックの与え方に注目し，特に周囲からの承認が目標志向性の形成と変化にどのように影響を与えるのかという点から，以下の４つを課題として挙げ，後の各章で検討している．

１．幼児を対象とした目標志向性測定方法の開発

２．幼児の目標志向性の特徴となるような認知的枠組みの確認
３．達成に関する認知的枠組みの形成についての検討
４．達成に関する認知的枠組みの変化についての検討

第２章では３つの研究により，幼児に適用可能な目標志向性の判定の方法が開発された．

研究１では，目標志向性の判定方法の開発と妥当性の検討が行われた．まず，目標志向性を判定する質問として，子どもが経験したことの中から，「上手にできてほめられた時（パフォーマンス・ゴール志向）」と「一生懸命練習して初めてできた時（ラーニング・ゴール志向）」を想起させ，どちらがうれしいか比較選択させた．この回答とパズル課題における挑戦性を対応させて，目標志向性の判定の妥当性が検討された．その結果，ラーニング・ゴール志向と判定された子どもは挑戦性が高く，パフォーマンス・ゴール志向と判定された子どもは挑戦性が低いことが実証された．

研究２では，目標志向性の判定の領域間における信頼性が検討された．領域の異なる３課題について目標志向性をたずね，３つの回答の一貫性と，各回答とパズル課題による達成行動の指標との関連が調べられた．その結果，領域間の一貫性は低かったが，実際の経験をもとにした質問が，達成行動を予測するものとして最も有効であることがわかった．

研究３では，目標志向性の判定の経時的信頼性が検討された．半年後に再テストを行った結果，目標志向性の安定性が実証された．

以上のことから，幼児を対象とした目標志向性の判定方法として，二者択一の質問による判定が可能であると判断された．

第３章では 2 つの研究により，幼児が達成場面において用いる認知的枠組みの特徴と，目標志向性との関連について明らかにすることが目的であった．

研究４では，目標志向性による承認認知の違いが検討された．成功場面における周囲の人からの承認の認知の程度を，目標志向間で比較した結果，パフォーマンス・ゴール志向の子どもはラーニング・ゴール志向の子どもよりも，周囲からの承認の認知が高いことがわかった．

研究５においては，実際の達成場面において承認／非承認のフィードバックを与えた時の，目標志向性による達成反応の違いが調べられた．パズル課題で成功と失敗を経験させ，承認／非承認フィードバックを与え，その後の遂行時間や能力についての認知を，目標志向間で比較した．その結果，パフォーマンス・ゴール志向の子どもは，結果に関係なく承認フィードバックによる情報に注目し，自己の能力を高く認知していることが判明した．

以上のことからパフォーマンス・ゴール志向の幼児は，達成場面における「承認」に関する情報の選択的注目や，承認されることに価値を置き重みづけをして解釈するような認知的枠組みを持っているということが明らかになった．

第４章では 3 つの研究により，目標志向性形成に対する養育者・保育者のフィードバックや養育態度の影響について検討された．

研究６では，養育者のフィードバックの与え方の影響が調べられた．まず，子どもが実際にどのようなフィードバックを受けているかを調べ，パズル課題における達成反応との関連を検討した．その結果，失敗した後に承認フィードバックを受けている子どもは mastery 反

応を示す傾向にあり，失敗後非承認フィードバックを受けている子どもは helpless 反応を示すということが判明した．

研究７，８では，養育者の日ごろの養育態度が，目標志向性と達成反応の挑戦性にどのような影響を与えているかが検証された．

まず研究７で，「達成に関する養育態度尺度」の開発を行い，研究８では，養育態度，子どもの目標志向性，子どもの挑戦性，の関連についてパス解析が行われた．その結果，子どものペースに合わせた成長を期待するような養育態度と，ラーニング・ゴール志向との関連がみられ，他者との比較を強調するような養育態度との関連は見られなかった．

以上のことから，日ごろのフィードバックや養育態度によって，養育者や保育者は，達成結果と価値を結びつけるような認知的枠組みの形成に影響を与えており，それが目標志向性の個人差となって現れていると考えられた．

第５章では 2 つの研究により，目標志向性の変化の可能性とそのメカニズムについて検討された．

研究９では，個人特性と状況要因の組み合わせが，達成行動へどのように影響するかが検証された．その結果，個人の目標志向性と教示とが合致する場合は遂行が促進され，合致しない場合は遂行の低下が見られた．また合致しない場合にも，教示のタイプによって，遂行の回復が早い場合と遅い場合があることがわかった．この結果は短期的な影響を示したものであるが，長期にわたって周囲からの働きかけがあった場合，個人の認知的枠組みの変化を伴って，目標志向性が周囲からの要請に沿うように変化する可能性が示唆された．

研究 10 においては，個人の目標志向性の変化に対する様々な要因の影響について，幼稚園の年長児クラスの活動における観察データを用いた分析がされた．その結果，幼稚園のクラスという集団の中で達成に関する共通認識が形成され，その枠組みによってクラスの成員が位置づけられ，その対象となった子どもの達成行動が変化したことが観察された．つまり，達成に関する認知的な枠組みは，周囲からの一方的な働きかけによって個人に影響を与えるというよりも，本人も含めた周囲との相互作用により変化するものであると示唆された．

■　本論文の評価

以上が本論文の概要である．本論文は，目標志向性を「達成に関する認知的枠組み」であるととらえなおすことにより，幼児期における目標志向性の形成と変化がどのようなメカニズムで生じているのかを明らかにした．

従来の達成動機づけ研究では，その研究領域が教育やスポーツ，あるいは産業が中心であったため，幼児を対象とした発達的研究は少なかった．本論文の特徴のひとつは，幼児を対象として達成動機づけの発達的な研究を行ったという点である．また幼児を対象とした研究を行うため，初めて目標志向性の判定方法の開発を行った点も，評価に値する．

さらに，従来の研究では，達成行動を起こす動機づけの強さの原因を，個人のパーソナリティー特性に求めるか，個人外の誘因の強さに求めるものが多く，個人の発達的変化，という視点が生まれづらかった．しかし本論文では，目標を「達成に関する認知的な枠組み」であるとすることで，「目標志向性は経験によって影響を受け形成され，変化する」という視点を導入した．これにより目標志向性の形成過程や変化について検討することができるようになり，目標志向性の発達的研究にひとつの可能性を示すことができたという点で評価される．

また本論文の結果から，幼児では養育態度や承認フィードバックの与え方，特に「承認」

を与える対象とタイミングが目標志向性や達成行動の個人差に影響していることが判明し，達成動機づけの育成という教育的視点からも有益な結果を得たと考えられる．

本論文の問題点として，目標志向性の判定に 1 項目のみの質問を用いたことの信頼性の更なる検討の必要性が挙げられる．また，質問内容がそれぞれの目標志向性に則していたか，協力児がその内容を理解していたかについて，客観的指標を用いた検討が必要であったことが指摘される．

また，幼児期から児童期への認知的枠組みの変化について検討されていないことがあげられる．発達的研究を行うためには，幼児期のみを対象とするのではなく，その後の変化についても検証し論じるべきである．また本論文では，比較的，短・中期な目標志向性の変化の可能性が示されたが，今後は短期的・長期的視点を組み合わせることで，動機づけの発達的変化をモデル化することが必要であると考えられる．

以上いくつかの問題点はあるが，これまで見過ごされてきた幼児を対象とした達成動機づけの発達的研究である本論文は，博士論文として十分評価できると考える．

以上の審査結果から，本論文審査委員会は，本論文を博士（人間科学）学位を授与するに相当すると判断した．

４．高崎文子氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査委員	早稲田大学教授	博士（人間科学）（大阪大学）	野嶋栄一郎	印
審査委員	早稲田大学教授	〃	石田敏郎	印
審査委員	早稲田大学教授	〃	根ヶ山光一	印
審査委員	日本女子大学名誉教授	教育学博士（東京大学）	宮本美沙子	印
審査委員	早稲田大学教授	文学修士（早稲田大学）	青柳肇	印